

今日の聖書箇所を読み御心に聞いていくには、パウロという人のことを少しでも知ることが必要です。パウロは、タルソスというユダヤの国からすれば外国で生まれたユダヤ人で、生まれた年は定かではないのですが、イエス・キリストの生年とほぼ同じ、そしてADの36年ごろから60年ごろにかけて、キリスト教の伝道者として大きな働きをした人でした。なくなったのも厳密にはわからないのですが、AD62年頃か64年ごろといわれています。おそらく60代までは生きてわけで、当時の平均寿命からすれば、けっして若死にはいえない年齢まで生きたのです。しかも彼は30年近くにわたって、使徒として福音伝道に邁進することができたわけで、これは例えばステファノのように殺された人もいた当時の厳しい環境を思うと驚くべきこととっていいことでした。

パウロの生涯の前半はユダヤ教ファリサイ派の信者としての歩みでした。詳しいことはわかりません。しかし彼がキリスト教徒を迫害していた、ということは間違いのない事実で、彼は反キリストの急先鋒であったわけです。その彼が神によってキリストと出会い、キリストの僕としての歩みを始めていくのです。彼はただキリストに仕える、ということを漠然と生きたのではなく、異邦人をキリストへと導き、キリストの信実によって生きるものとする、つまり異邦人伝道という特別な任務を自分は与えられている、ということを受けとめて、回心以後30年以上にわたって生涯の歩みを献げていくのです。パウロの人生の歩みは回心を契機に大きく変わっていくのですが、実は彼は多くの点でそれまで通りだったともいえるのです。彼はペトロをはじめ、イエスの最初の弟子たちとはいろいろな点で違っていました。ペトロは漁師だったのですが、彼らのほとんどはガリラヤを生活圈とする人々で、ユダヤの国の中で、生涯のほとんどを暮らした人々でした。ところがパウロは外国生まれのユダヤ人で、彼はヘブル語を話せるほか、アラム語も話すことができ、ラテン語もわかり、当時の国際語であったコイネーギリシャ語を母語としていました。彼は都会人であり、国際人（コスモポリタン）であり、彼があれほどの伝道旅行をすることができたこと自体、彼が子どものころから身に着けてきたものが生かされたということに他なりません。パウロの伝道の視点が広く当時の世界に向けられていたことも、彼の生まれ育った環境、成育歴と深くかかわっている。つまり彼の受けてきた教育とか、語学力とか、国際的なセンスとか、そうした

ものがみな伝道に生かされた、ということ。その意味で彼は回心後もこれまで通り、持てるものを活かしたと言えるのです。パウロは自分がキリストの僕として与えられて使命は異邦人伝道だ、という強い自覚があった。そして、事実異邦人伝道に30年以上携わってきたのです。パウロはまさに、ギリシア・ローマ世界における福音伝道にうってつけの伝道者だったのです。しかもありがたいことに彼はその異邦人伝道の中で、手紙を教会宛に書き送り、その手紙を通して福音伝道に奉仕したのです。更にありがたいことにその手紙を集め、編集し、公刊する人がおり、パウロが活着しているときだけでなく、パウロの死後も、手紙を通して、人並外れた福音の使者としての彼の言葉を聞くことができるのです。

しかし、パウロの中には、異邦人伝道だけへの熱心があったのではなかった。パウロは東方と西方を同時に視野に入れていた人だったのです。東方というのは、エルサレムを中心とするユダヤ地域のことであり、西方というのはローマ、スペイン・イタリアと続くまさに地中海の東の地域のことです。パウロがローマ、スペインにまで福音を宣べ伝える、という使命を持っていたことは、パウロのこれまでの伝道旅行などの彼の熱意を見れば、よくわかる。さらに加えて、パウロはキリストの再臨、終末がきわめて近いと信じていたのです。だからこそ、パウロは与えられた時間の中で、世界伝道をしていきたいと心から願ったのです。そうした西方への伝道への思いの一方で、彼は東方への思い、エルサレムの人々、エルサレム教会に対する強い思いを持っていた。エルサレム教会というのは、最初のキリスト教会の中できわめて重要な要となる教会でした。キリストの直接の弟子たちによって形成され、主イエスの実の兄弟が教会の重鎮であり、まさしく最初期のキリスト教会の有力な信徒たちの群れでした。しかしパウロはエルサレム教会と必ずしも円満な関係ではなく、福音とは何かということをめぐる論争も続けていましたし、例えばユダヤ教以来の割礼をめぐることはまったく平行線でした。福音とは何か、ということの理解がすでに大きく違っていました。したがって、エルサレム教会の中にはパウロのことをよく思わない人々は相当数いました。しかし、パウロはエルサレムの地に立てられた使徒たちの教会を経済的に支援することは、異邦人教会の課題であると受け止めていました。実際異邦人教会での献金活動に多くの時間と思いを割いていました。だから、パウロはローマ伝道や、スペイン伝道に向かう前に、どうしてもエルサレムに行き、直接異邦人教会からの献金を手渡し、さまざまな違いや課題があってもなお、キリストの教会として支え合って歩んでいくことへの思いを分かち合っていきたいと願ったのです。エルサレム訪問は強い彼の意志でした。

今朝、朗読された使徒言行録21章にはパウロが三回目の伝道旅行を終えて、エルサレムに向かう様子が記されています。コス島、ロドス島を経て、フェニキアに向かう船に乗り込み、キプロス島を経て、ティルスに到着したことが記されています。そのティルスの町に七日間滞在したのですが、その間にもティルスにいたキリスト者たちから、エルサレムには行かない方がいい、という説得を受けたことがわざわざ書かれています。そもそもエルサレムの町のキリスト教徒以外のユダヤ人たちは、ユダヤ教を離れ、キリストの僕になっているパウロのことを憎々しく思っている人は少なくなかった。その意味でパウロがエルサレムに行くということは、エルサレム教会の内にも論敵はおり、トラブルとなる火種はあり、外にはパウロを殺しかねない人々が少なからずいたのです。エルサレムから遠く離れたティルスの町の信者たちもそのことを知っていたのですから、よほどのことです。彼らは霊に動かされて、エルサレムに行かないようにとパウロに繰り返し言った、とあるのですが、それはどんな霊だったのか。ある人はこの霊は悪霊なのではないか、といます。そうかもしれない。しかし、もしそうだとすれば、わたしたちの日常の判断というものはいかに悪霊に動かされているものなのか、とあらためて思われるのです。

しかしパウロの思いは強く、予定の滞在期間がすぎると、パウロはエルサレムに向かって出発するのです。人々は家族を連れて見送りにきて、共に祈ったのです。

それからパウロたち一行は航海を続け、プトレマイスにつき、翌日にはカイサリアに行き、フィリポの家に泊まったのです。幾日か滞在していると、そこに、ユダヤからアガポという預言する者がやって来て、パウロに向かって、「もしあなたがエルサレムに行くのなら、あなたは縛られて異邦人の手に引き渡される」、あなたは逮捕される、と予告したのです。実際パウロはこの後、エルサレムで捕らえられ、ローマ軍の介入するところとなり、ローマに護送されることになるのです。アガポの予告通りになるのです。

同行していたルカたちも、その町の人たちと共に、エルサレムにはいかないでほしい、と頼んだ。パウロは人々の度重なるエルサレムに行かないでほしいとの声にたいし、「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることはかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」それを聞いていた人たちは、パウロは自分たちの願いを聞き入れようとしないので、「主のみ心が行われますように」といって、口をつぐんだ、というのです。

パウロのそばにいた人は口をつぐんだ、ではわたしたちはどうなのか。わた

私たちは、パウロに対して、そんな危険を道は選ばないでほしい。今エルサレムに行くことは自殺行為にもなりかねない、世界伝道のためにも、今はエルサレムに行くべきではない、と言う側に回るのか。それとも、パウロの言葉に深く同意して、送り出すのか。パウロのエルサレム行きを止めようとした人々の思いは常識であり、良識であると判断しているわたしたちがいるのではないか。パウロの判断は無謀だ、と思う人は多いでしょう。もちろん、パウロの言葉に共感する人もいるのでしょう。だが、「主イエスの名のためならば、縛られることも、死ぬことも覚悟している」という覚悟をその人が持っているかどうかはまた別の問題です。

パウロは人間の判断からすれば、危険極まりない道であっても、神に仕え主に仕えるものとしては、主の示し給う道を行くのだ、という思いがあったのでしょう。

わたしたちはこのパウロの判断をどう受けとめていくのか。パウロは人間の罪、ということ人間一般の問題としてではなく、自分自身の事柄として受け止めてきた人です。パウロにとって罪の問題とは、神の意志に従うのか、自分の意志に従うのか、という現実的具体的なことでした。抽象的な話ではない。そして神の意志に従うべく招かれているにもかかわらず自分の意志に従っていくのが罪だ、ということがパウロの中にはあったのです。

13節のパウロの言葉の背後にはパウロがいつも抱えていた葛藤や悩みや苦しみがあったと思います。人は、中でもキリスト者は根本この問題の前に立たされている。神に従うのか、自分に従うのか。わたしたちはパウロの判断をすばらしいとか、立派だという言葉でまとめる前に、自分の問題として、このことに直面する。例えばパウロのように生きられないとしても、このように判断してエルサレムに行こうとした人がいることの前に、一人の人間として謙虚に向き合うべきなのです。自分に従うことの多いわたしであっても、パウロの判断の前に、静かに、謙虚にたって、自分の力では神に従うことができないわたしであっても、キリストの恵みを受けて、神の意志に従うものとさせてください、との祈りをすることができるものとしていただく、そういうことが大事なのではないか、と思います。